

様式第 4 号（第 4 条関係）

出張報告書	幹 事 長 印	経理責任者印
平成 29 年 11 月 6 日		
幹事長		
矢 野 正 憲 殿		
出張者氏名 矢 野 正 憲 印		
" 服 部 脩 二 印		
下記の通り報告します。		
1 出 張 先		
全国市町村国際文化研修所		
滋賀県大津市唐崎 2-13-1		
2 日 時		
平成 29 年 10 月 5 日（木）～ 平成 29 年 10 月 6 日（金）		
3 出張用務（宿泊を要する場合は用務）		
10 月 5 日（木） 13：00～14：30	1 協働と交流のまちづくり	
" 14：50～16：20	2 超高齢社会における自治経営モデル	
10 月 6 日（金） 09：00～10：30	3 地域の本来的価値と地域づくり	
" 10：50～12：20	4 地域を活かした農林水産物の海外販路開拓	
4 旅費・研修費等		
1 人 当たり		旅費総額 2 人分
交通費 6,340 円	合計額 25,980 円	
研修費 2,400 円		
食 費 2,000 円		
宿泊費 2,250 円		
合 計 12,990 円		

1 小布施町における協働と交流のまちづくりについて
講師 市村良三（いちむら りょうぞう）氏
長野県 小布施町長 「慶応義塾大学法学部卒」 72歳
① 内容
ア まちづくりの経緯
◎ 昭和51年に葛飾北斎の「北斎館」などの美術館を建設、小布施町に残された北斎の肉筆画を一堂に集めた「北斎館」を開館、当時は、田んぼの中の美術館と言われた。
◎ 地場産業・栗菓子店の老舗は小売り・飲食のサービスを始める。
◎ 町並修景事業～事業の特色
① マスタープランがないこと。（都市計画ではない）
② 時間を十分にかけて関係者の納得の得られることを前提に進めた。
③ 建物、機能等の要素を外に出さない（ゾーニングをしない）。
④ 補助金を受けない（ひも付きにならない）。
⑤ 田舎らしさを大切にすること。
⑥ 生活の居住空間の快適性を上げる。
◎ 花のまちづくり
景観を意識した町民が歩調を合わせるように「花」によるまちづくりを展開する。
更には「フローラルガーデン」の開園、「花仲間コンベンション・全国ガーデニングサミット」を開催した。

イ 協働のまちづくり
◎ 町外（優良で志の高い）企業との協働
◎ 小布施町の「農業」の資産を活用した農業立町の構想。
◎ 小布施クエスト～若者文化とスポーツ振興
◎ 車から人へ（国道 403 号線の整備デザイン）良好な景観と利便性の向上。
ウ 農村部の活性化と遊休空間の活用
◎ 強い吸引力を持つ拠点づくり「地域休養センター」等の活用。
エ 健康づくり事業（農業＋商業＋医療＋サービスのコラボ）
オ 様々な外部企業との協働（起業家の集うまち）
カ 若者の流れをつくる（小布施若者会議の開催）
（服部の感想）
過去5年間で、11,000人から15,000人位で推移する、高齢者の多い人口の町であるのに、ここ数年20万人以上の観光客が、毎年訪れている現状を見た時に、「この町の魅力は何か？」と、いうことに突き当たり、今回のセミナーに参加させていただき、町長の熱意ある講演を拝聴し、町民を愛して・町を愛して、今、何をすべきか？、何をしなければならないか？何が出来るか？を熟慮し決断された事業の推進であると思慮されます。
町民・庁職員等に過大な負担を強いることなく、今あるものを最大限に活かして町民が自ら率先して、町の発展と豊かな生活を過ごせることを、自覚させ、協働の重大さを、官民一体となって実践された、先駆的な事業の推進であると思います。
わが町、熊取町に於いて、もう一度しっかり足元を見据えて、豊かな・楽しい・熊取町の発展を願うばかりです。
以 上

2 超高齢社会において町村が先導する自治経営モデル
講師 辻 琢 也 (つじ たくや) 氏
一橋大学副学長 「東京大学大学院博士号取得」
① 内 容
ア 超高齢・人口減少社会の到来
◎ 現状が継続することを前提とすると、2100年には日本の総人口は5千万人弱まで減少し、明治末頃の人口規模になる見込み。
◎ 高齢者の中でも年齢階層により増加率が異なる。
◎ 単独世帯、特に高齢者単独世帯が増加する。
イ 地方財政の変貌と市町村合併
◎ 我が国の市町村数は、明治21年(1888年)には7万を超えていた町村が、明治、昭和、平成と3度の大合併を経て、現代では1,727市町村にまで減少。
ウ まち・ひと・しごと創生と地域圏構想の推進
◎ 「コンパクト+ネットワーク」の形成
◎ 雇用と豊かな生活環境の創出
◎ 広域連携・定住自立圏構想の推進
エ 広域的課題
◎ 地域医療・地域公共交通・多様な生活機能の確保
◎ 持続可能な地域づくりのための～「小さな拠点」～
オ 公営企業・地方独立行政法人改革と自治体間連携
◎ 複数市町村による地方独立行政法人の共同活用の新たな仕組み
◎人口減少問題に的確に対応する地方独立行政法人のあり方
カ 法定の実施主体代替スキーム以外の取組

◎ 国民への一定のサービスを保障すべきとの要請と、地域の実情に合わせた水準・手法を設定すべきとの要請を考慮して判断することが適当ではないか。
(服部の感想)
全国の市町村において、人口規模・面積規模・財政規模等大小の違いがあるのに、超高齢・人口減少問題は、共通した課題となっている現代社会をどのようにして生き抜くかが焦点である。
町村が先導する自治経営モデルがあるが、住民が望む「安心・安全・健康・楽しく過ごせる」まちづくりを前提として、住民・産業・大学等と協働のまちづくりを推進する必要があると考える。
以 上
3 地域の本来的価値と地域づくり一何を上乗せするかー
講 師 宮 口 と し み ち 氏
早稲田大学 名誉教授 「東京大学 大学院 卒」 71 歳
① 内 容
ア 自らの地域の本質を知る～日本はどういう地域からなっているのか～
◎ オーソドックスな日本
農村風景は、農家の背後に樹木に覆われた山、前の低地に水田で極めて高い生産力を誇る。
江戸時代の平和と新田開発の中で農業生産は安定、多くの都市が誕生。
◎ ユニークな日本
素直な農地売買が進み、水田ができなかった西日本の斜面集落（段々畑）
◎高度経済成長期以降の変化
都市の職場が爆発的に増え、農村の後継者までが都市へ出ていく、職場のある地方中心都市の市街地拡大と遠隔農山村の過疎化。
イ 農山村の価値はどこにあるか＝経済的価値とは別の人間論的価値＝
◎ 農山村の本質的価値は「人が自然と共生して生命を育む生産の場」であり、風景には「ゆとりと風格の美学」、自然を巧みに使いこなす手仕事の技がある。
◎ 新しい「道具・人材」を地域に上乗せされるべきで、土地と資源のある農山村では実現の可能性が大きい、今、農山村に関心を持つ若者が増加している。
ウ なぜ今農山村が注目されるのか？
◎ 都市にはない価値（豊かさ）に 20 代が関心を持つようになった。

◎ 過疎農山村には人間論的価値と社会論的価値が存在する、安心できる暮らし
の場が国の隅々に残って、高齢者を支える新しい仕組みも生まれつつある。
エ 都市的な地域の価値はどこにあるか？
◎ 人と人が接触する場と機会を作ることが肝要である。(広場をつくる)
オ 活性化することを根源的に考える。
◎ 人と人の間の反応で人は生まれ変わったり、新しい組織が生まれる。
カ 新たな接触をつくる交流・移住こそ地域に上乘せすべきこと。
◎ 違う系統の人は違う力とセンスを持つ、「よそもの・ばかもの・わかもの」
も同じこと。
◎ 交流は自らを成長させ、移住を喚起する。
キ おわりに
大きな都市とは異なる価値を持つ、支え合う豊かな少数社会を実現することが地
域創生である。
(服部の感想)
全国的に農山村地域は、大都市圏の近郊であれば、農業の需要が大きく、やり方・
方法等によっては非常に「遣り甲斐のある事業」となるでしょう。
今、問題になっているのは、過疎化している山村の農業である。
如何にして、若者を転入定住させ農業をさせるかが大きな課題である。
幸いにも、わが熊取町は、大都市圏の中にあるので、農業生産を希望する若者を転
入定住させる絶好の場所であると考えられる、遊休空間の有効活用、空家の有効利用
等を組み合わせた「転入定住促進策」を構築し、スピーディーに事業の推進をするこ
とが大事だと思います。
以 上
4 地域の強みを活かした農林水産物の海外販路開拓
講 師 江 口 一 (えぐち しんいち) 氏
株式会社 轍 (わだち) 代表取締役
① 内 容
ア 日本料理への高い関心
◎ 盛り付け・器など見た目も美しい (食文化)

◎ 日本産緑茶（カフェや家庭で身近な飲み物として浸透・「抗酸化作用」が老化対策に有効と女性に注目されている。
イ 食文化・食産業のグローバル展開
◎ 日本食文化の普及
・ 日本食の普及を行う人材育成
・ メディアの効果的活用等を各省連携して実施
◎ 世界の料理界で日本食材の活用推進
・ 日本食材と世界の料理界とのコラボレーション
・ 世界中の料理人が日本のゆづをメニュー化
◎ 日本の「食文化・食産業」の海外展開
・ ビジネス環境の整備
・ 人材育成と出資による支援
ウ 「農林水産業の輸出力強化戦略」に沿った農林水産物・食品の輸出促進
◎ オールジャパンでの統一的・戦略的なプロモーション等の取組について、実行状況の把握や調整等を実施する。
エ 輸出の目的と目標～「何のために輸出をするのか」
◎ 販路拡大・新規販路開拓
◎ 国内での需要調整・価格安定感
◎ ブランド化・エコ効果
◎ 経営・販売面、モチベーション
(服部の感想)
地域活性化のために行政はどんな政策をして何をするか、民間力を活用すること、民間（地元住民と協働）にできること、しっかり地に足を付けて、地道な取り組みをすることが大事である。
人材育成は、地域の一生の力となる、つまり地域の活力となるもので、地域の宝であることを深く認識するべきである。
熊取町の住民が考える価値・幸せ・もの・地元愛をまず大阪府内に発信し、食・文化・観光等地元の資源を最大限活用して、PRするべきである。
以 上

## 5 報 告

### (1) テーマ「協働と交流のまちづくり」

講 師：市村良三氏（長野県小布施町 町長）

山間地の多い長野県にあって、三方を川に囲まれ日当たりの良い緩やかな傾斜地がのびやかに広がる小布施町。

この土地は「米が育たない」だから「付加価値」に活路を見いだす。

「町並修景事業」「若者会議」「オープンガーデン」などの独自の企画に果敢に取り組み人口1万1000人の町ながら、年間120万人の観光客を惹きつけることに成功する。

「町並修景事業」…当時民間人であった市村氏は行政が計画を立てた記念館事業と自宅兼稼業であった栗菓子屋と酒屋もこの計画地区にあり、行政と一緒に周辺整備をすることになる。地権者は民間と法人を合わせて6人であったが、それぞれのニーズを満たす方法として2年間で100回程度の会議を重ねる。

その結果、先祖伝来の土地を売らず交換や賃貸という方法でコストをかけずに、自然で落ち着いた町並みを作り出すことができたようだ。

修景とは景観の修復の意味で、これまでのハード面重視の町づくりの範囲にはない日本初めての試みとして注目もされたようだ。

外から評価をされたことで、住民たちも景観という意識に目覚め「外はみんなのもの」という考え方が自然にできあがっていったようだ。

熊取町でも駅西周辺の整備事業が進められるが、景観に意識をしながら外国人観光客の誘致に繋げるべきではないか。

「若者会議」…外部から若者を招いて、町の若者たちと一緒に小布施町について、日本の将来について、ディスカッションしてもらおうという企画で始めたものが、町の若者に刺激を与え、高齢者にも大いに刺激を与えたようである。

地域間の交流が世代間の交流にもなり得るといことがわかる。

この事は、これからの熊取町にも大いに通用することだと思う。

「オープンガーデン」…小布施町は住民が自宅の庭を公開する「オープンガーデン」を全国に先駆けて始めたことで知られる。

小布施町は、従来から花のまちづくり運動を推進し、町内の自治会による「花いっぱい運動」などが盛んであったが、2000年頃から住民が庭を来訪者に公開するようになり、「花」を軸に据えたまちづくりが加速し、「オープンガーデン」の先駆けになる。



他の自治体は花が咲く最盛期に期間を限定して庭を公開するケースがほとんどであるなか、小布施町は1年中公開する。

美しい花が来訪者に見てもらうことが目的の一つだが、庭を公開することで生まれる交流を大事にしている。

熊取町は閑空を目前に持つ町として、この「オープンガーデン」を活用し、住民が自宅の庭を開放し、来訪者をもてなすことが、観光客の誘引策になりうるかもしれない。

## (2) テーマ「超高齢社会において町村が先導する自治経営モデル」

講師：辻 琢也氏（一橋大学副学長）

2100年には日本の総人口は5000万人弱まで減少し、明治末頃の人口規模になる見込み。これまで家族類型の主流であった「夫婦と子」から2050年には少数派となり、単独世帯が約4割と一番多くなり、中でも高齢者単独世帯が増加する。

これからの熊取町にもあてはまる。また、住宅ストックと世帯数との関係を見ると、世帯数の伸び以上に住宅ストックが増加し、ストック超過が拡大してきており空き家数も増加し続ける。反面、今後世帯数の減少による住宅需要は減少していくことになるので、各市町村が空き家バンクなどの政策で細やかな目配りが必要となり、ホテルを持たない熊取町として、民泊などで活用できるかもしれない。

## (3) テーマ「地域の本来的価値と地域づくり」一何を上乘せするかー

講師：宮口 侗迪氏（早稲田大学名誉教授）

九州から東北までの農村風景は同じで、農家の背後に樹木に覆われた山、前の低地に水田風景があるのがオーソドックスな日本の風景である。

農村に不要な人が都市へ流入し、多くの都市が生まれて現在の日本の姿を形づくっている。

熊取町もベッドタウンとして発展し、4つの大学があり教育文化都市として発展している。

この強みをこれからも活かすべきだと強く感じる。

(4) テーマ「地域の強みを活かした農林水産物の海外販路開拓」

講師：江口 慎一氏 (㈱轡 代表取締役)

日本食ブーム日本食人気により、海外の日本食レストラン数は 9 年で 3.7 倍に増えている。また、海外に類似のものがない「日本もの」「海外でも生産されているが、日本産の品質が優れている」果物は中東などでは「食べるダイヤモンド」として重宝されている。

国内市場は人口減少高齢化の進行により縮小しているが、世界の食市場は 340 兆円→680 兆円 アジア圏は 84 兆円→233 兆円規模になっていくという事は、食品産業も海外へ目を向ける必要がある。

しかし、日本の「食文化・食産業」をグローバル展開を推進するためには、GLOBALG.A.P やハラール、HACCP 等の認証取得をしなければいけない。この認証をとっていない作物が多く 2020 年東京オリンピック・パラリンピック大会の飲食提供で日本ものを提供できないかもしれない。

これからの農業も海外で通用する GLOBALG.A.P HACCP の認証を得る努力が必要になり、これが海外販路開拓につながると考える。

平成 29 年 10 月 05 日 (木)

AM 9:00 服部 発

AM 9:08 佐古 発

AM 9:13 矢野 発

AM 9:20 日根野駅 着

AM 9:25 日根野駅 発  
はるか 10 号 (2 号車 9 番)

AM 10:34 京都駅 着  
京都駅 発 (湖西線 15 分)  
唐崎駅 着

AM 11:10 全国市町村国際文化研修所 着

平成 29 年 10 月 06 日 (金)

AM 12:30 研修会終了 研修所 発

(唐崎駅 発 京都駅 着)

(京都駅構内で 昼 食)

PM 2:00 発・2:30 発の「特急はるか」で天王寺駅で乗り換え  
阪和線で熊取駅 着

領 収 書 矢野正憲様

Receipt  
領収年月日 2017.-9.27  
金額 ¥6,340 (消費税等込み)  
上記金額確かに領収いたしました

購入商品 JR乗車券類 JR tickets  
(10113 4枚)  
西日本旅客鉄道株式会社

熊取駅  
熊取駅F1発行 30115-01

印紙税申告納  
付につき大淀  
税務署承認済

領 収 書 服部脩二様

Receipt  
領収年月日 2017.-9.27  
金額 ¥6,340 (消費税等込み)  
上記金額確かに領収いたしました


購入商品 JR乗車券類 JR tickets  
(10113 4枚)  
西日本旅客鉄道株式会社

熊取駅  
熊取駅F1発行 20114-01

印紙税申告納  
付につき大淀  
税務署承認済

**キャッシュサービスご利用明細**

毎度ありがとうございます。  
お取引内容をお確かめのうえ、  
お持ち帰りください。

 **りそな銀行**

取引銀行	取引店	口座番号
0010	0230	2082*****
取扱店	お取引日	時刻
25802	29-09-27	10:47
お取引内容	お取引金額(円)	手数料
振込	¥13,300	¥432
お取引後の残高(円)		おつり
*****		

お振込明細またはご案内 電信

お受取人  
みずほ銀行  
大津支店  
普通 1705329  
サ(イ)セ(ン)コ(シ)チ(ョウ)ソ(ン)ケン(シユ)ウ(サ) 様

ご依頼人  
ハツトリ シユウ(ウ) 様

電話番号 0724-52-1724  
取扱番号 400010

印紙税申告納  
付につき大淀  
税務署承認済

\*印紙税を納付しない場合は\*印で消しております。 →